

## 「レジャー研究におけるM.カプランの位置」

九州大学 金 崎 良 三

### I. はじめに

現代社会の特質の一つとして、労働の量的、質的变化ということが指摘されよう。労働時間の短縮は、世界的傾向でありわが国はアメリカ、ソビエト、ヨーロッパの先進諸国に遅れながらも徐々に短縮されてきている。労働時間の短縮は、必然的に個人の自由に処理することのできる余暇時間の増加という結果をもたらす。経済成長による生活水準の上昇、生活様式や価値観の変化等を背景に、レジャーの大衆化は現実のものとなった。さらに、労働のもう一つの側面である質的側面の変化によって、単調な反復的作業労働や過度の精神的緊張を伴うような仕事が増加してきており、そこから労働における人間疎外の問題が生じている。こうして、かつては労働のなかに生活の喜びや価値を見出してきた人間は、レジャーの領域においてそれらを求めざるを得ないというような状況におかれようとしている。

私は、このような社会的、経済的背景のもとに取組むべき課題として、レジャー研究の必要性を認めるものである。

ヨーロッパにおいては、既に1883年、ラファルグが労働者のためのレジャーに関する最初のパンフレット『怠惰の権利』を出して以来、レジャーの社会学的研究あるいはこれに類する研究は近年にいたって増加する傾向にある。アメリカにおいては、1899年にヴェブレンが『有閑階級の理論』において、レジャーの社会学に対してその基礎を提供して以来、1920年～30年代には経験的研究が表わされるようになり、多くのレジャー論争が交された。ランドバークやスティナー、ミッチェル、マーンソン、ニューメイヤーなどが代

表である。しかしながら、レジャー研究が花開き、新しいマス・レジャー時代の到来をこの方面から示すようになるのは1950年代以後のことである。

わが国の場合、レジャーの実態やレジャーへの考え方は欧米に比べて10年以上おくれているといわれている。現に、「レジャー」という言葉が使われだしたのは、1960年代に入ってからであり、研究の面からみてもまだ萌芽期にあるといえよう。「レジャーとは何か」といった本質論的問題が不明確のまま、レジャー産業とかレジャー消費とかの言葉が示すように、レジャーが氾濫しその現象面に振回されている感がある。レジャー研究に取組むにあたり、この分野における既成の理論を検討することは大切であり、そこから自分なりの研究の方向を見出したいと思う。本稿では、レジャーに関する基礎的研究として、今日のアメリカにおける代表的レジャー研究者であるカプラン<sup>(注1)</sup>のレジャーに関する論点を、特にレジャー研究の基本的尺度となるレジャーの概念及びレジャーと労働の関係を中心に取上げ、他の何人かの研究者との比較においてこれを検討し、彼のレジャー研究における位置を明らかにしようとした。

### II. レジャーの概念について

レジャー研究において、その原点にあたるレジャーの概念は、人によって捉え方が異なり、その意味も多義的に使用せられているようである。しかしながら、<sup>(注2)</sup>The Oxford English Dictionary<sup>(注3)</sup>やWebster's New International Dictionary<sup>(注3)</sup>等の辞典が示すように、レジャーは一般に個人の自由な時間もしくは機会を意味するものとして用いられている。アメリカにおけるレクリエーション

ン研究で知られるニューメイヤーは、レジャーについてその定義は非常に多義的であるが、その主たる強調点は時間の要素であるとして Dictionary of Sociology ( Philosophical Library 1944年) に用いられているレジャーの定義をもって、その本質を示しているようだとしている。それによると「レジャーとは、人生において実際的に必要な仕事に従事した後の自由時間である。

……中略……レジャーという概念は、24時間から仕事、睡眠、その他必要なことのための時間を引き去ったものであるという算術的な考え—すなわち余剰時間—から人が楽しみのために利用する時間といった通俗的考えにいたるまでさまざま<sup>(注4)</sup>である」。このようにニューメイヤーは、レジャーをすべての義務や拘束、その他実際に必要な仕事に従事したあとの自由時間であるとしている。しかしながら、マス・レジャー時代といわれる現代にあっては多くの人々が多くの自由時間とその手段を所有するようになり、自由時間の過し方もますます複雑になってきている。そしてまた、自由時間あるいはレジャーが人々の生活に対してもつ意味も変化してきている。こうした状況のなかで、レジャーを単なる時間の概念と規定することの不十分な点が指摘されるようになった。例えば、グリーンバーグは「もとより余暇というのは自由で空白な時間だという単なる時間的尺度からだけで捉えられる問題ではない。余暇はそれが享受される条件としての物質的、社会的状態によって、その内容が決定されるものとして把握される必要がある<sup>(注5)</sup>」と指摘しており、またリースマンもこの点について、「現代において遊びは、もはや単なる仕事時間ないし仕事間隔を生活の中からさしひいたときに出てくる残りといった性質のものではない。それはそれ自身、生活技術における熟練と能力を開発する領域にだんだん<sup>(注6)</sup>ってきているのである」と述べている。これらは、現代の社会生活におけるレジャーの意義と役割が重要であり、レジャーはこれを取りまく社会の条件との関係から捉えられなければならないことを示唆するも

のである。カブランもこのようなレジャーをめぐる社会的背景をふまえたうえで「レジャーは消費される時間以上のものである。それは人を再生、再発展、再認識、再更生、再実現させるための最上の方法となる。レジャーの本質は、する、みる、考える、計画する、評価する、思索にふけるなど幾つかの領域にかかわるものである<sup>(注7)</sup>」と、レジャーを単に時間の概念ではなく、もっと積極的な存在として捉えているのである。

以上のような考え方から、カブランはレジャーの本質的要素として次の7つをあげ、理念型としてのレジャーを捉えている。

- (1) 経済的機能としての仕事に対置されるもの
- (2) 楽しい期待と回想が伴う
- (3) 社会的義務の最小のもの
- (4) 自由の心理的知覚
- (5) 文化的価値と密接な関係をもつ
- (6) 無意味なものから重要なものまで広範囲にわたる
- (7) しばしばブレイの要素によって特徴づけられる

レジャーはこれらのうちのどれかの要素が強調されたものである<sup>(注8)</sup>。

この理念型としてのレジャーは、特定なレジャーの形式を観察し判断する場合に使用されるものであり、各個人によるレジャーの主観的考え方を含めながら、どのような活動でもレジャーになり得るという基本的仮定のもとに以上7つの要素のうち一つまたは幾つかが強調されたものとして考えられる。そしてまた、この理念型は、ある特定の活動といった内容を示すものではなく、むしろレジャーを特定の社会関係であるという前提に基づいているのである。

次にカブランのレジャーの捉え方を、レジャーに明確な定義を与えるところのフランスのデュマゼディエと比較しながらさらに理解することしよう。デュマゼディエは、「レジャーとは、個人が彼の仕事や家族ならびに社会の義務を離れて、休養や気晴らしもしくは知識を広めたり、自発的社

会参加を促し、創造的能力を自由に行使するため  
に、自らが自由にあてるところの活動である」と<sup>(注9)</sup>  
定義し、その基本的特徴として、(1)義務からの自由、  
(2)没利益性、(3)気晴らし、(4)パーソナリティ  
の発達、をあげている。つまり、レジャーは休息  
することから創造的能力を生かすことまでにわたり、  
それらすべてのレジャー活動は自由時間において  
生まれ、義務としてあるいは必要から行なうもの  
でもない。それらは、家庭や社会との関係におい  
て生まれ、金銭的利益を得るためではなく満足  
を求めて自由にそれ自体を目的とした活動であり  
とりわけ個人にとっても社会にとっても意義ある  
ものなのである。

さて、カブランとデュマゼディエのレジャーの  
捉え方についてここでいえることは、第一に、レ  
ジャーは単なる時間的概念としてでなく、そのなか  
で営まれる活動やそれに伴う態度をも含めた概念  
として考えられていることがわかる。第二に、  
レジャーは個人の自由ということを前提にしてい  
るが、その殆どどの活動は集団の形式で一定の社  
会関係において営まれるためにそこにまったくの  
自由があるのでなく、何らかのかたちで義務が伴  
う。カブランの「社会的義務の最小のもの」とデ  
ュマゼディエの「interpersonal obligation」<sup>(注10)</sup>  
はこのことを指している。しかし、この種の義務  
は自発的に遂行されるものであり、仕事における  
強制的な義務とは異なる。第三に、カブランのい  
う「仕事に対置されるもの」とデュマゼディエの  
「没利益性」の要素は、レジャーが金銭的、物質  
的利益と結びつくものではないことを示している。  
デュマゼディエは、レジャーが実用的要素を含ん  
でいる場合、これを「セミレジャー」というカテ  
ゴリーに入れるのであるが、レジャーが仕事と結  
びついてしまえばそれは本来の意味を失ってしまう。  
第四に、カブランはレジャーは文化的価値と  
密接に関係するものとして労働その他日常の雑事  
による疲労の回復のための休息、休養をレジャー  
の領域から除外している。これに対しデュマゼディ  
エは、この休息をもレジャーに含めている点、概

念として広く受けとめているといえる。

このようにカブランは、レジャーはその社会に  
おいて広く生活全体と密接にかかわるものであり、  
それは人々をして積極的、創造的ならしめる価値  
を有するものとして、個人の社会的、文化的活動  
への参加を促すものとして考えているといえよう。

### Ⅲ. レジャーとレクリエーション

アメリカにおいては、レジャーよりもレクリエ  
ーションという言葉が積極的に使われる傾向にあ  
るようであるが、その考えはいかなるものであろ  
うか。これを、先に引用したニューメイヤー及び  
レクリエーション研究の権威者といわれるバトラ  
ーの著書から眺めることにしよう。

ニューメイヤーは、先にもみたようにレジャー  
を時間概念としているが、レクリエーションに  
ついては次のごとく述べている。「レクリエーシ  
ョンとはそれが個人によってであれ、集団によ  
ってであれ余暇(レジャー)に営まれる活動であり  
その活動から得られる直接的、間接的な報酬によ  
って強制されたものではない。活動それ自体によ  
って直接に動機づけられた自由な楽しい活動を意  
味する。…中略…レクリエーション活動は、  
人間のいかなる年齢層においても営まれる活動で  
あり、むしろその活動は時間的要素、行なってい  
る人の状態、態度、環境条件によって決定づけら  
れるものである」と。<sup>(注11)</sup>つまり、レクリエーション  
はレジャーにおいて営まれる活動であり、活動そ  
れ自体固有の価値があり、その活動に対する動機  
があって行なわれる。

またバトラーは、レクリエーションの基本的特  
徴として、(1)人は内部からの衝動以外の何の強制  
もなくそれを欲し、選択し、行なう、(2)その活動  
がもたらすその場での直接の満足のために行なう  
(3)その活動自体が目的であり、それ自体の中に価  
値をもっている、という点をあげ「活動という面  
からみたレクリエーションはそれをやること自体  
のほかはいかなる報酬をも意識的に求めないで、  
通常、余暇において行なわれ、人間にその身体的

精神のおよび創造的精力のはけ口を与え、人間の外部からの強制によってでなく、内部からの要求によって行なう活動である。その活動は人間から快よい満ち足りた応答を引きだすがゆえにレクリエーションとなるのである。要するにレクリエーションは、それが人間に直接もたらす個人的な楽しみや満足のゆえに個人が自由に行なうあらゆる経験、活動の形式なのである<sup>(注12)</sup>と規定している。さらにレジャーとの関係について、「余暇(レジャー)とレクリエーションはしばしば本質的に同じものかあるいは切り離すことのできないものとされている。事実大多数の人々にとってレクリエーションの機会をたいていその人たちの余暇に限られており、レクリエーションは第一義的には余暇活動なのである。…中略… 個人または地域社会が余暇を建設的で十分満足の与えられるようなレクリエーションに使う機会がなければ、余暇は重荷となるであろう。幸福と自由の代わりに倦怠と不満足が余暇によってもたらされる。…中略… レクリエーションのもつ多くの価値は個人及び社会にとって有益なもののみに限られているのはいうまでもない<sup>(注13)</sup>」と述べている。このように、レクリエーションは余暇活動のなかでも特に価値的と考えられる活動を示す言葉として捉えられている。ニューメイヤーとバトラーは、いずれもレジャーを時間的要素の強調されたものと捉えレクリエーションは若干の立場の相違はあるが、それはレジャーに営まれる広範な価値的活動を包括したものであるとして考えている。これらは、先にふれたカプランやデューマゼディエのいうレジャーと殆んど同義に用いられていることがわかる。さて、アメリカにおいてこのようにレクリエーションを一般に価値的に定義するなかであって、カプランは「この言葉はラテン語の "recreatio" からきており、元気の回復、弱ったあるいは疲れた状態から正常な身体的状態へ回復させること、新しい精力と体力を吹きこむこと、つまり労働のあとの体力と精力の回復を意味している。…中略… レクリエーションは日常の雑事や必要な仕事を続

<sup>(注14)</sup>けるための再生または準備である」と述べ、自由時間における活動のうちでも労働によって生じた疲労を回復させ、明日の労働のために行なわれる休息または活動をレクリエーションとして、すなわち、レクリエーションは労働に従属し労働とは切り離せない存在として捉えている。

カプランのこのようなレクリエーションの捉え方は、The Oxford English Dictionary 等に示されるところであり、それは語源に忠実な解釈といえよう。

いま、ニューメイヤー、カプラン、デューマゼディエが捉えるレジャーとレクリエーションの領域をわかりやすく図示すると以下のようになろう。

図1 レジャーとレクリエーションの領域

Realms of Leisure and Recreation

|          |      |       |               |
|----------|------|-------|---------------|
| ニューメイヤー  | 労働   | 食事・睡眠 | レクリエーション      |
|          | 拘束時間 |       | レジャー(自由時間)    |
| カプラン     | 労働   | 食事・睡眠 | レクリエーション レジャー |
|          | 拘束時間 |       | 自由時間          |
| デューマゼディエ | 労働   | 食事・睡眠 | レジャー          |
|          | 拘束時間 | 自由時間  |               |

かくして、カプランは労働やその他必要から解放された自由時間において、労働による疲労の回復あるいは明日の労働のために営まれる休息、その他労働に従属する行為をレクリエーションとし、もっと積極的で文化的価値を有する創造的表現のための活動であるレジャーとは区別するのである。このようにレジャーやレクリエーションの捉え方に相違がある点については、それらの概念の歴史的、社会的背景が問題にされる必要がある。わが国の場合、レクリエーションは戦後人々の生活のなかに浸透してきたのであるが、それはアメリカの影響を多分に受けており、学校教育のなかにもとり入れられるなど、その用いられ方は極めて教育的色彩が濃い。他方、レジャーの方は経済的發展とともに、つまり商業主義との結びつきのう

えで普及してきた点を考えると、同じ自由時間の活動であっても、レジャーを没価値的なものとして、レクリエーションを価値的なものとして捉えるのが正当のように思う。

#### IV. レジャーと労働

かつて、労働は人々にとって単に生計の手段として物質的、金銭的利益を得るためにのみ存在するのでなく、人々は労働するなかで生活の核心を見出してきた。アメリカにおいて、それは特に宗教倫理との結びつきが非常に強く、ずっと諸価値の源泉としてあるいは人間の根本として据置かれていた。しかしながら、産業化の著しい現代のアメリカ社会にあって、労働の性質や労働と労働以外の社会的要因との関係に変化が生じてきていることは争えない事実であり、従来からのピューリタンの労働への態度は失われつつある。このような社会的背景のもとに、カブランは「労働に対する伝統的な価値が動揺し始め、これに代ってレジャーの価値が頭角を現わしてきたところから、ここに一つの文化の混乱が生じている」<sup>(注15)</sup>と指摘し、レジャーパターンに影響を及ぼす要因として、(1)仕事の地理的環境、(2)職場での人間関係、(3)仕事に要する技術及び教育程度、(4)労働時間、の4つをあげ、さらにその社会における労働のタイプあるいは労働のもつ意味の違いによって人々のレジャーへの参加もレジャーがもたらす意味、そしてレジャーと労働の関係も違ってくることを説いている。特に、これは大抵の経済的に進歩した文明国にあてはまることであるが、農民や未熟練労働者が減少して熟練労働者が増加し、商業や金融、政治、保険関係といったいわゆる非生産的な専門職に携わる人々の存在、増加によって特徴づけられるような社会では、人々は土地や機械を相手とするのではなく、他人とのかかわり合いを必要としており、仕事は他の人々を操作する技術によってもしくは少なくとも共働によってその成否が決まるものである。従って、他人の生活に対しても敏感にならざるを得ず、仕事のなかに仕事以外で

の生活からの価値や理念、態度がもち込まれる可能性が強く、ここに労働とレジャーの境界が曖昧になってくるのである。

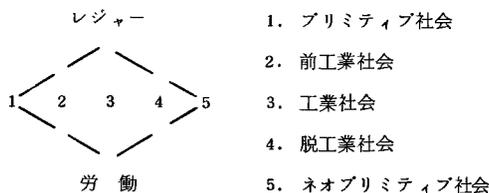
リースマンは、仕事の世界が崩壊したことによってレジャーの世界に課せられた重荷が途方もなく大きなものになっていることを認めながらも「レジャーはそれ自身仕事を救うものにはならない。レジャーが人間にとって意味のあるものであるためには、仕事もまた意味のあるものでなければならぬ<sup>(注16)</sup>であろう」と、レジャーにはそれほどの期待をもち得ていない。またミルスは、労働の領域と同じように娯楽面にも大量生産方式が適用されていることを考察して、「このように余暇に楽しむ娯楽活動は大量生産的になったが、この変化で心理的に重要な点は、労働の福音を説いた旧中流階級の労働倫理が余暇の倫理におきかえられてしまい、それは同時に労働と余暇とをきわめて対照的にはほとんど別世界のように分離させてしまったことである。今では、労働の価値を定めるものは労働自体ではなく、その労働によって楽しみうる余暇の価値によって定まる。余暇の領域に含まれるべきものが労働の価値を判定する規準となる。労働に含まれる意義は実は余暇によって与えられたものなのである<sup>(注17)</sup>」と述べ、人々が余暇(レジャー)の価値によって労働を評価し、意義づけることを指摘している。しかしながら、ミルスは「このようにして大量生産されている娯楽活動が人間の気分を紛らせはするが、理性や感性を豊かにし、自発的な独創性を涵養するようなものではない<sup>(注18)</sup>」と、レジャー産業によってもたらされている現実の娯楽活動に対して何の希望も見出していない。これらに対して、カブランは労働とレジャーの境界区分が曖昧になってきていることから、レジャーは単に労働からの自由という問題にとどまらず労働の場で得られた価値 — 態度、目標、関心など — がレジャーの領域にもち込まれるし、逆に労働以外での生活の価値も仕事のなかにもち込まれる可能性が強いとみるのであり、オートメーションの発展による生産過程の変化、労働の局

部化によって人間の非人格化が進み、労働においての価値が得難くなっているところから、レジャーにこの問題の解決を迫るのである。すなわち、「レジャーは単なる労働からの疲労の回復以上のものであり、それは深遠なる価値を潜在的にもっており、創造的表現のためのさまざまな活動を提供することができるのである<sup>(注19)</sup>」と。

このようにカブランは、従来の社会学者が貴族的価値や封建的な生活様式に注目してきたそれ以上に大衆に対して眼を向けており、レジャーの大衆化時代におよんでレジャーの意義と役割の重要性を強調する立場にあると考えてよいであろう。ここで、ミルスが労働と余暇(レジャー)が明確に分離されてしまったとみると、カブランが両者の区分が曖昧になり融合に向うとの見解をとるのとは、レジャーの捉え方の相違も勿論考慮しなくてはならないが、社会の時代的把握のズレと労働パターンの相違があるからであろう。ミルスにおいて、職人的な生活様式では労働と遊びとの間には何の区別もないのであるが、彼のいうホワイトカラーの生活には職人氣質は存在しないのである。カブランの場合、非生産的労働に従事する専門職の増加によって特徴づけられるような社会であり、いわば脱工業社会に向う状況からの把握である。ちなみに、彼は最近の論文<sup>(注20)</sup>のなかでレジャーと労働の境界を図2のごとくモデル化している。

図2 レジャーと労働の関係

Relationships Between Leisure and Work



プリミティブ社会において、労働とレジャーあるいは非生産活動は一致しており、次の前工業社会または封建社会に移行するにつれ両者は次第に

異なったものになり、それは工業社会において最高に分離する。そしてこれが脱工業社会へ移行するにつれて、今までとは逆に労働とレジャーの区分が次第に薄れてゆき、両者が再び一致するのが彼のいうネオプリミティブ社会である。このことについて私的な立場から述べるならば、もちろん一部には労働とレジャーが心理的にも形態的にも一致するような人々、例えばプロのスポーツ選手、タレントや芸術家、作家といった自由業に携わる人々は、このような社会の流れに関係なく存在する。しかしながら、社会全体としてみると、ただ労働がレジャー的要素を帯びたり、レジャーが仕事の一部になったりするだけで、両者の一致をみるネオプリミティブな社会など理想型図式にしかすぎない。

V. ま と め

以上、カブランのレジャー論について、レジャーの概念の捉え方及びレジャーと労働の関連性を中心にその立場を検討してきた。カブランは、レジャーを孤立した存在として取り上げるのではなく、またグリーンバグやリースマンの指摘するように単に時間的要素としてでなく、それをとりまく社会的要因との関係において捉えなければならないという視点から、レジャーをそこにおいて営まれる活動やそれに伴う態度をも含めた意味として理念化している。そして、レジャーはその社会において人々の生活と密接にかかわるものであり、それは人々をして積極的、創造的ならしめる価値を有するものと考えられている。レジャーという言葉は、確かに自由時間の増加を背景にして出てきたものであるが、今日、それを時間的要素とのみ捉えるのは、時代にそぐわないようである。また、語源に固執する必要もない。私自身、レジャーを自由時間における活動の総称として、没価値的に考えていくのが良いように思う。

他方、レジャーとレクリエーションの関係については、カブランはレクリエーションを労働による疲労の回復のための休息、その他労働に従属す

る行為であると、極めて低次元の位置づけをしており、レジャーとは区別している。この点、ニューメイヤーやバトラーに代表されるように、アメリカで一般にレクリエーションを価値的に定義するのは多いに立場を異にしている。同じアメリカにおいても、このように相異した見解があるということは、結局はその研究者自身のおかれた環境や思想を背景にした方法論の問題に帰着せざるを得ない。

次にレジャーと労働の関係は、相補的なものであるが、社会の産業化が進行するにつれ、労働に対する伝統的な価値が崩壊し始め、これに代って

レジャーが人々にとって重要な領域となってきた。リースマンやミルスもこのことを同様に認めるのであるが、彼らはレジャーが労働に代ってその価値をもち得るかどうかを懐疑的に眺めており、レジャーに対してそれほど期待もしていないようである。これに対してカプランは、レジャーの大衆化時代におよんで、レジャーは今後の社会の流れからみて、将来ますますその文化的、創造的価値を人々にもたらすであろうといった概して明るい展望のもとに、その意義と役割の重要性を強調する立場にあるといえよう。

(注1)

M. カプラン (ph. D) は現在、University of South Florida の社会学教授をしており、同時に同大学内に設置されているレジャー研究所 ISL (Institute for Studies of Leisure) のデレクターとして所属している。彼は社会学をはじめ、文化人類学、政治学、音楽、芸術を学び、またバイオリニスト、著作家、コンサルタントとしても活躍しており非常にユニークな経歴と資格の持主である。レジャーの分野にあっては、国際的にも広い視野をもっており、ユネスコ・国際社会学会の Commission on Leisure and Mass Culture にフランスのデュマゼディエらと共に加っている。また、ISL はレジャーに関する問題を大々的、組織的に取扱うアメリカ唯一の研究機関であり、現在及び将来の脱工業社会のための政策遂行、社会理念の発展に寄与する目的で1968年に創設されている。

(注2)

「The Oxford English Dictionary」"Leisure"  
P192 Oxford University Press 1961.

(注3)

「Websters New International Dictionary」  
"Leisure" P1414 G & C. Merriam Co 1959

(注4)

M.H. Newmeyer and E.S. Newmeyer 「Leisure and Recreation」 Revised Edition, A.S. Barnes and Co. New York 1949

(注5)

C. グリーンバーグ「インダストリアリズムの時代における労働と余暇」 「マス・レジャー論」 P13 日高六郎監修 紀伊国屋書店 1961

(注6)

D. リースマン「孤独な群衆」 P257 加藤秀俊訳 みすず書房 昭和43年

(注7)

Max Kaplan 「Leisure in America」 P289 John Wiley & Sons INC. New York 1960

(注8)

Max Kaplan 前掲書 P22

(注9)

Joffre Dumazedier 「Toward a Society of Leisure」 P16~17 The Free Press 1967

(注10)

J. Dumazedier "Leisure" 「International Encyclopedia of the Social Science」 P250 Crowell, Collier and Macmillan, INC 1968

(注11)

M.H. & E.S. Newmeyer 前掲書 P22

(注12)

G.D. バトラー「レクリエーション総説」 P24 三隅達郎訳 ベースボールマガジン社 昭和37年

(注13)

G. D. バトラー 前掲書 P 21 ~ 23

(注14)

Max Kaplan 前掲書 P 19

(注15)

Max Kaplan 前掲書 P 32

(注16)

D. リースマン 前掲書 P 31

(注17)

C. W. ミルス 「ホワイトカラー」 P 219 杉 政孝訳  
創元新社 昭和43年

(注18)

C. W. ミルス 前掲書 P 218

(注19)

Max Kaplan 前掲書 P 297

(注20)

Max Kaplan 「LIFESPAN, LIFESTYLES AND  
LEISURE」 P 10 ~ 11. For Lifespan Conference,  
Santa Barbara, California, 1970